

謝冰心作品の出版状況

——一九三〇年代の海賊版について——

田川めぐみ

謝冰心は一九一九年、五四文学革命の真つ最中に作家活動を始めた。その流麗な文体は白話文を書くことを実践し始めたばかりの当時の文学界において熱烈な歓迎を受け、彼女の作品は多くの読者を獲得した。謝冰心は時代の潮流に乗り、一九二二年までのわずか四年のうちに小説三二篇、詩三五首^①、散文四六篇を発表している。愛や光明を訴える小説及び星、花、海を詠う小詩が有名で、中でも小説「超人」(一九二二年)は「青年を救う上帝(神)^②」とさえ言われた。一九二二年の『小説月報』には謝冰心作品を賞賛する評論が八篇も掲載されており、高い評価と注目を一身に集めていた様が窺える。だが、そうした文壇の高い評価は、決して長くは続かなかつた。一九二〇年代半ばから謝冰心の作品に対する評価は厳しいものへと変化していく。

例えば蔣光赤は「現代中国社会與革命文学」(一九二五年二月一日)に、

温室の花、冰心女士は人々の喝采を浴びている。しかし今の世界では、憂いのない衣食の足りた俗物だけが、温室の花に酔いしれ、花の香を嗅いで満足できる。貧しい人々、社会を憂う人々には、温室さえないの

に、何の花があるのか？彼女は本当にお嬢さんの代表だ。家庭を一步も出ていない。彼女の人生観はお嬢さんの人生観。彼女の回憶は旧家庭の生活に限られる。彼女の作品中に、時代と社会の背景を見出すことができるだろうか？もし彼女が女性の代表だというなら、金持ちの、貴族的な女性の代表である。国家、社会、政治とは関係がない。彼女は元々こうしたものは必要なく、弟妹、母親、或いは花、香、海、笑があれば充分なのだ。我々が今必要としている文学家はこうではない！

と書いているし、陳西滢（陳源）もまた「新文学運動以来の十部著作」⁽⁴⁾（一九二八年六月）に、ほとんど誰もが知っている冰心女士。彼女は詩人だが、すでに出版した二冊の小詩にはどれほどの光る寶石もない。「超人」⁽⁵⁾に収められた小説の大部分は、一目で学校の門を出たことのない聡明な女の子の作品だとわかる。人物と物語の筋が現実とは遠すぎる。

と書いている。このような謝冰心を「世間知らずなお嬢さん」とする批評はだんだんと増えていき、文壇での謝冰心の地位は低下していった。黄英（錢杏邨）の「謝冰心」⁽⁷⁾（一九三二年）に至っては、

中国の新文学運動の前期にあつて、かつて当時の社会に大きな影響を与えた女性作家が「超人」の作者である。彼女の文体は文壇に大きな波を起し、非常に流行した作風だった。彼女の「超人」は脆弱な青年たちに大きな影響を与え、彼女の詩や詩的な散文は青年たちの共鳴と模倣を引き起こし、「冰心体」という文体を生み出した。彼女の作品の技術は上述の通り成功を収め、青年たちの煩悶する情緒、大海と児童、母性愛を描写するのに長けていた。だが、彼女の作品は学校と家庭の外に出ることがなく、魯迅のような作家たちのように、筆の攻撃的な勢いで、広く社会の人々と深い接触を持つことができなかった。現在に至っては、時代の進展によつて、彼女の影響力はだんだん消えていき、彼女の作品はただの歴史の遺跡となった。彼女に

新しい進展があり、彼女の人類社会に対する見解を根本的に変えなければ、彼女の黄金時代は決して再び来ないのだ。新しい偉大なる希望を、この過去の有力な作家に残しておこう。

と謝冰心を「過去の作家」と見なしているほどである。一九三四年には『小説月報』の編集者であった茅盾までもが、「冰心女士の作品中には神秘主義の色彩が混じっている（現実的でない）」、「彼女は『問題』の前から逃げ出して、（中略）『母親の懐の中』に隠れるほかない」などと否定的な意見を述べており、こうした派閥を問わない多方面からの批判は謝冰心を圧迫した。謝冰心は批判を無視することも、反論することもできなかった。

元々謝冰心には臆病なところがある。本名ではなく「冰心」というペンネームを使って作品を発表したのは「とても臆病なので、他人に笑われ批判されるのが心配だった」⁹からであったし、「もし私が作家だったら、／ただ自分の作品がこうであるよう望む／他人の頭に入る時、／普通に、気にも止めず、一言の言葉もない；／流水のように過ぎ去り、／賞賛に値せず、／批評、論駁する価値は更でない」¹⁰という詩も書いている。賞賛を集めるうちはよいのだが、批判が集中するようになる辛いのだろう。謝冰心は批判を受け入れて自らの作風を変え、労働人民への尊敬と共感を前面に打ち出した「分」（一九三一年）や「冬児姑娘」（一九三四年）等の作品を発表した。だが、かつてのように文壇の注目を一身に集めるには至らなかつたし、外圧によつて変更させられた作風を維持して書き続けることは難しかった。謝冰心の作品執筆の速度は鈍り、新作（特に小説）はあまり書かなくなつてしまつた¹¹。

文壇での評価が下落し、新作をあまり発表しなくなつた一九三〇年代の謝冰心。「過去の作家」という評価もやむを得ないように感じられる。だが、そうした状況にありながら、一方で、一九三〇年代には謝冰心の作品集が意外なほどさかんに出版されたのである。正版だけでなく、海賊版（盗版）までもが多数出版された。一九三〇

年代の謝冰心は本当に「過去の作家」だったのであろうか。

本稿では一九三〇年代に出版された謝冰心の作品集を、海賊版に重心をおいて紹介し、文壇とは異なる出版社（及び読者）の評価について考えてみることにする。

二

海賊版の前に、まずは一九三〇年代に出版された謝冰心の正版の文集を⁽¹²⁾見てみる。

- ・ 短編小説、散文集『往事』一九三〇年一月初版、一九三一年一月四版、一九四七年三月十八版
- ・ 長編散文『南帰』一九三一年九月初版、一九三二年七月四版
- ・ 小説集『姑姑』一九三二年九月初版、一九三七年六月四版
- ・ 詩、散文集『閑情』一九三三年一月初版、一九三五年十月三版
- ・ 小説集『去国』一九三三年一月初版、一九三五年十月再版
- ・ 旅行記『平綏沿線旅行記』一九三五年二月初版、一九三五年六月再版

発行部数は定かではないが、いずれの本も短期間に版を重ねていることがわかる。その他、一九三二年から三年には謝冰心の最初の全集が北新書局より出版された。『冰心小説集』（冰心全集之一、一九三三年一月）、『冰心詩集』（冰心全集之二、一九三二年八月）、『冰心散文集』（冰心全集之三、一九三二年九月）がそれである。当時謝冰心は三二歳で、彼女自身が「私はまだ中年に至っていないし、作品の質もまだ大したことがない。全集を出す必要がない。」⁽¹³⁾と書いているように、年齢から考えると早すぎる全集の出版であった。それにも関わらずこの時期に全集を出版することになったのは、謝冰心の文集の海賊版が市場に氾濫し、真の全集が必要になったため

である。『冰心小説集』の「自序」にも使われた「我的文学生活」⁽¹⁴⁾に海賊版についての記述がある。

一昨年（一九三〇年）の春、ある年少の友人がにこにこしながらやって来て、「あなたはまた新しい作品を出したのに、どうして僕に送ってくれないの？」と言うので、どの本かと尋ねた。彼が言うには『冰心女士第一集』。私は愕然とし、不思議に思った！後に聞くとところによると二集、三集も続々と出たようだ。友人から何冊か借りて見ると、中身は皆私自身の作品である。しかし編集は乱雑で、序言は狂っており、題目は変更され、表紙は醜い。私はそれを見て非常に不愉快になった。上海新文学社あるいは北平合成書社印行と印刷してあるが、私は北平、上海にはこれらの出版社がないことを知っているから、きつと北平の街中の本屋が印刷した本に違いない！（中略）

昨年（一九三一年）の春、私は又東安市場へ行った。ある露店で若い店員が愛想笑いをしながら『冰心女士全集続編』という本を手渡してきて、「この本をお買いなさい。面白いですよ。女の人が書いたのです」と言う。私が笑って「もう読んだことがあるわ」と言うと、彼は「これは新しく出たやつですよ。開いてご覧なさい！」と言う。受け取って目次を開くと、数行の「我不知為你洒了多少眼泪」、「安慰」、「瘋了的父親」、「給哥哥的一封信」などというタイトルがあり、それがにわかに私の注意を引いた。露店のそばに立って、慌てて眼を通し、私は怒らずにはいられなかった！これらを誰が書いたのかはわからないが、この文章は私のものではなく、思想は更に私のものではない。これでは私が他人の作品を盗んだことになってしまふ！私は生涯他人の功績を掠め取ろうなどとは思わないし、他人が私の名を勝手に借りるのはもつと望まない。この文章から、当時の海賊版には版權を取らずに勝手に出版したものだけでなく、別人の書いた作品を謝冰心作と偽って出版したものまであったことがわかる。

中国では清末に上海などで版權保護の告示が出されるようになり、清宣統二年（一九一〇年）には「大清著作権律」が公布された。その第二章「權利期限」には著作権は著作者に生涯あると明記されており、続けて著作者が死亡した場合や団体名義の著作の著作権等についても規定を設けている。また第四章「權利制限」では、登記を経た著作は他人が複製模造してはならず、各種の詐称でもって著作人の権利を侵した場合罰金を科すと定められている。民国時期に入ると北洋軍閥政府が「出版法」（一九一四年二月五日公布、一九二六年一月二九日に廃止）、「著作権法」（一九一五年公布）を制定。その「著作権法」は「大清著作権律」を基礎に修訂を加えたもので、条文の内容は基本的に同じだった。また国民党政府も一九二八年に版權法を定めた。このように当時の中国には著作権を守るための法律が存在していたのであるが、それらの法律は著作者に本名でその著作を登録させ、出版を管理し、それによって世論をコントロールすることを主目的にしており、海賊版の氾濫を取り締まる力は強くなかったよう¹⁵だ。

一九三〇年代には実に多くの海賊版が出版された。北新書局、開明書店等、謝冰心作品の正版を出版している出版社が海賊版を告発し、禁止しようとしたが、効果はなかった。謝冰心自身も「法律は著作権、出版権に対して従来何の保証もないから、公訴しても効力があるとは思えない」と「我的文学生活」の中に書いている。北新書局の主人から「（海賊版の出版）禁止の上申書を出しても、禁止できるものは自分で（海賊版の出版を）禁じるものだし、出すやつは勝手に出す、唯一の是正の方法は、自分自身の作品を整理して真の全集を出版することだ」と言われ、やむなく正版の全集を出版して海賊版に対抗することになった。

こうして小説、詩、散文に分かれた三冊の全集が出版された。『冰心小説集』は最後に出版されたのだが、収録作品の発表順序に基づき全集之一とされた。『冰心小説集』一九三六年一月五版、一九三七年六版；『冰心詩集』

一九三四年八月四版；『冰心散文集』一九三六年一月七版、一九三七年五月八版¹⁶と、やはりいずれも出版後数年で重版されており、売れ行きの良さが窺われる。文壇で「過去の作家」と見なされても、出版界においては、謝冰心はまだまだ注目を集めており、その作品集は人気があつたのである。そうでなければ海賊版が出版されることもなかつたであろう。

三

当時出版された謝冰心の作品集の海賊版とはいかなるものであつたのか。まずは中国国家図書館（旧北京図書館）所蔵の海賊版を紹介し、その収録作品について考えてみたい。

①『冰心女士小説集』近代文学名著、上海新文学社、一九二九年初版、一九三〇年再版

「悟」、「六一姊」、「去国」、「一篇小説的結局」、「莊鴻的姊姊」、「最後の安息」、「一個兵丁」、「一個軍官的筆記」、「姑姑」、「劇後」、「惆悵」〔詩〕、「鄉愁」、「紙船」収録。

②『冰心女士全集』上海合成書店、中華民國一九年（一九三〇年）

「自序」〔「寄小讀者四版自序」〕、「沙穰雜記」〔「山中雜記——遙寄小朋友」〕、「書信（一—十七）」〔「寄小讀者」〕、「悟」、「英士去国」〔「去国」〕、「一個慈藹的兵丁」〔「一個兵丁」〕、「一個軍官的筆記」、「姑姑」、「劇後」、「鄉愁」、「紙船」、「惆悵」〔小説〕、「到青龍橋去」、「夢」、「兩個家庭」、「別後」、「一篇小説的結局」、「莊鴻的姊姊」、「可憐的鄉女」〔最後の安息〕、「往事（二）」、「新詩」〔「春水」〕、「一朵白薔薇」、「水神」、「病的詩人」、「詩的女神」、「謝思想」、「假如我是個作家」、「將來」的女神〕、「嚮往」、「晚禱」、「不忍」、「哀詞」、「十年」、「使命」、「紀事」、「岐路」、「中秋前三日」、「十一月十一夜」、「安慰」収録。

③『冰心文選』唐宗輝編、上海做古書店、一九三六年一月初版

編者著「付印的起緣」、「世界上有的是快樂……光明」、「無限之生」的界綫、「夢」、「國旗」、「笑」、「寄小讀者（二五）」、「愛的實現」、「鳥獸不可與同群」、「離家的一年」、「寄小讀者（十九）」、「閑情」、「分」、「寄小讀者（九）」、「寄小讀者（十）」、「別後」、「說幾句愛海的孩氣的話」、「好夢」、「悟」、「信誓」、「使命」、「紀事」、「惆悵」〔詩〕、「鄉愁」、「我再也不能承受這樣的溫存」、「嚮往」、「赴敵」、「繁星」十四節、「春水」十五節収録。

④『冰心文選』沈文耀編、上海時代出版社、一九三七年五月初版

「世界上有的是快樂……光明」、「無限之生」的界綫、「夢」、「國旗」、「笑」、「寄小讀者（二五）」、「愛的實現」、「鳥獸不可與同群」、「離家的一年」、「寄小讀者（十九）」、「閑情」、「分」、「寄小讀者（九、十）」、「別後」、「說幾句愛海的孩氣的話」、「好夢」、「悟」、「信誓」、「使命」、「紀事」、「惆悵」〔詩〕、「鄉愁」、「我再也不能承受這樣的溫存」、「嚮往」、「赴敵」、「繁星」十四節、「春水」十五節収録。

⑤『冰心文選』朱楠秋編、奉天東方書店、一九三九年二月初版、一九四〇年十月再版

「超人」、「姑姑」、「第一次宴會」、「冬兒姑娘」、「煩悶」、「通信」〔寄小讀者（七、十）〕、「山中雜記」、「南歸」、「畫——詩」、「問答詞」、「夢」、「笑」、「無限之生」的界綫、「分」、「好夢」、「閑情」収録。

⑥『冰心全集』第二集、現代創作文庫、奉天文華書局、康德六年（一九三九年）三月二五月初版、康德十年（一九四三年）五月八版

編者著「題記」、「冰心全集自序」〔「我的文学生活」〕、「冬兒姑娘」、「分」、「第一次宴會」、「姑姑」、「煩悶」、「離家的一年」、「惆悵」〔小說〕、「兩個家庭」、「愛的實現」、「別後」収録。

⑦『冰心選集』文芸名著、陳磊編、上海綠楊書屋、出版年は不詳（一九三〇年代から一九四〇年代のものと思われる）

編者著「編集題記」、「西風」、「斯人独憔悴」、「寂寞」、「姑姑」、「冬兒姑娘」、「第一次宴会」、「煩悶」、「超人」、「愛的實現」、「別後」、「離家的一年」、「無限之生」的界綫、「夢」、「寄小讀者（一、三、五）」、「閑情」、「說幾句愛海的孩氣的話」、「笑」、「惆悵」、「詩」、「鄉愁」、「相思」、「倦旅」収録。

出版年月日順。一―内は筆者が書き加えた。

「我的文学生活」の中で謝冰心が憤っている『冰心女士全集統編』は、中国の主要な図書館に所蔵されておらず、残念ながら見る事ができなかった。しかし、『冰心女士全集』②という本があった。タイトルから『冰心女士全集統編』の正編である可能性もある。「我的文学生活」中に『冰心女士全集統編』の出版社が書かれていないのはつきりしないが、合成書店（上海）は謝冰心が名を挙げた合成書社（北平）とよく似ているし、『冰心女士全集』という割に多くの作品が欠けているので、統編が出版されてもおかしくはない。その上、この本には謝冰心が指摘する題名の変更が見られ、「去国」を「英士去国」、「一個兵丁」を「一個慈藹的兵丁」、「最後の安息」を「可憐的郷女」としているし、更には「惆悵」という小説まで収録している。謝冰心は「惆悵」という詩は書いているが、小説は書いていない。つまり、この本は別人の書いた作品を謝冰心の作品に混ぜて出版しているのである。『冰心女士全集統編』と似たタイプの海賊版であると言えるだろう。

なお、「惆悵」という小説は、『冰心女士全集』②だけでなく、『冰心全集』⑥にも収録されている。②は上海の、⑥は奉天の出版社の本であり、収録作品を見比べても特に関連は見出せないが、謝冰心の作品ではない小説を揃って収めているのだから、両者には何らかの関係があつたのであろう。

この小説「惆悵」については後で改めて述べることにし、七種の海賊版に収録されている作品についての考察を続ける。

①は謝冰心が「我的文学生活」中で名を挙げた上海新文学社印行の本である。『冰心女士小説集』というタイトルだが、「惆悵」、「郷愁」、「紙船」という詩三首も収録している。①と②は収録作品が類似しており、ジャンル別に分けて表にすると左のようになる。

① 小説	「悟」、「去国」、「一篇小説的結局」、「莊鴻的姊姊」、「最後の安息」、「一個兵丁」、「一個軍官的筆記」、「姑姑」、「劇後」 「六一姊」
詩	「惆悵」〔詩〕、「郷愁」、「紙船」
② 小説	「悟」、「英士去国」〔一篇小説的結局〕、「莊鴻的姊姊」、「可憐的郷女」〔最後の安息〕、「一個慈藹的兵丁」〔一個兵丁〕、「一個軍官的筆記」、「姑姑」、「劇後」 「惆悵」〔小説〕、「兩個家庭」、「別後」 「郷愁」、「紙船」
詩	「新詩」〔春水〕、「二朶白薔薇」等 「自序」〔寄小讀者四版自序〕、「沙穰雜記」〔山中雜記——遙寄小朋友〕、「書信」〔一〇十七〕〔寄小讀者〕、「往事」〔二〕、「到青龍橋去」、「夢」
散文	

②には散文や「新詩」というタイトルでまとめられている詩が収録されているためわかりづらいが、小説に注目すると「兩個家庭」、「別後」、「六一姊」を除いた九篇が共通している。①、②の出版以前に謝冰心は三七篇もの小説を書いているので、その中から①は十篇、②は「惆悵」を除き十一篇の小説を選んで、そのうちの九篇が

共通するというのは偶然とは思えない。出版にあたって両者に何か関係があったのであろう。また、②に収録されている「新詩」は正版の詩集『春水』（一九二三年）、散文は通信集『寄小読者』（一九二六年）及び短編小説、散文集『往事』（一九三〇年一月）から取られたもので、それらの本の大部分をそっくり収録している。詩集『繁星』（一九二三年）や短編小説、散文集『超人』（一九二三年）の作品は一篇も収録しておらず、編集時に参考にした本とそうでない本との差ははっきりと見て取れる。要するに②は①の小説と『往事』、『寄小読者』の散文、『春水』の詩を合体させた本なのである。

②と⑥、①と②以上に相互の関係が明らかであるのが、③と④である。この二冊は編者の書いた「付印的起縁」の有無を除き、収録作品、その排列、全てが同じである。④が③をコピーしたものと思われる。内容が同じなのに、出版社名だけでなく編者名も変えて出版しているのが面白い。

さて、実は上に挙げた七種の本のうち、⑤以外の全てに「惆悵」という作品が収められている。①、③、④、⑦は詩、②、⑥は小説という違いはあるが、特に評判になった訳でもない「惆悵」がこれほどよく収録されているのは不思議なことである。そして、この「惆悵」と共に多くの本に収録されているのが「郷愁」という詩である。「惆悵」は謝冰心が一九二三年八月二五日にアメリカ留学へ向かう船上で書いたもので、『小説月報』第十四巻第十一号（一九二三年十一月）に掲載され、後に詩、散文集『閑情』に収録された。その二日後の八月二七日にやはり船上で書かれた「郷愁」は、『晨报副鐫』一九二三年十月六日に掲載され、後に詩集『春水』に収録されている。この二首の詩は書かれた時期、内容には関連があるが、全く別々に発表された作品なのである。それが揃って収録されているのは、やはり海賊版が編集の過程で他の本を参考にしてしているためだろう。

海賊版を出版するに当たり、出版者が最も関心を寄せるのは、その本が売れるかどうかである。そしてよく売

れる本を作るには、よく売れている本を真似るのが簡単かつ確実である。少なくとも売れない不人気な本は真似するまい。正版が版を重ねるように、海賊版もよく売れる作品が別の本に収録されることで重ねて出版されている。このことから一九三〇年代当時の謝冰心の人気の高さを窺うことができる。

四

謝冰心は「我的文学生活」の中で、海賊版である『冰心女士全集続編』に「我不知為你洒了多少眼泪」、「安慰」、「瘋了的父親」、「給哥哥的一封信」という自分のものではない作品が収録されていた、と書いている。『冰心女士全集』(②)、『冰心全集』(⑥)に収録されている小説「惆悵」もまた、上記の作品と同じく海賊版に混ぜられた別人の作品である。まずは小説「惆悵」の粗筋を紹介したい。

主人公の青年学者薛炳星(男)は華北大学から講演を依頼され、上海から北京へとやって来た。夏期休暇中北京で書物を書くことになった薛炳星は、父親の友人宅に滞在することにし、その家の娘黄施因と、当時やはり黄家に滞在していた劉若渠(女)、時折黄家を訪ねてくる衛希禔(男)と知り合う。三人は華北大学の学生で、交互に薛炳星の仕事を手伝い、時に彼の話を聞き、議論を交わした。四人は交流を深めるが、やがてその関係は難しいものになっていく。

劉若渠は薛炳星に思いを寄せるが、薛炳星は応えない。一方衛希禔は以前から黄施因のことを慕っており、薛炳星に相談をもちかける。薛炳星は衛希禔を応援すると言うのだが、内心は複雑であった。衛希禔はついに求婚の手紙を出し、劉若渠から衛、黄の二人が婚約したと聞かされた薛炳星は、北京を離れ杭州大学へ赴任することを決意する。ところが、黄施因は実は薛炳星のことを慕っていたのだ。黄施因は衛希禔の求

婚を断り、杭州の薛炳星と手紙を通じて交流を深める。

そのまま時が経ち、黄施因たちの卒業の日となる。失恋した衛希禔はアメリカへ行き、劉若渠は国許へ帰るようになった。ここに至ってようやく薛炳星は黄施因に求婚し、二人は結ばれた。

以上のように、いわゆる四角関係をテーマにした小説である。男女四人の葛藤が生々しく描かれており、謝冰心の作品とは考えにくい。一九三〇年代以前の謝冰心の小説は、家庭と社会の問題か、父子母子兄弟間の愛情と矛盾を主要なテーマにしており、男女間の恋愛を登場させることはほとんどなかったからである。数少ない例外として、謝冰心も一九二九年十二月に男女の三角関係を扱った小説「三年」を書いてはいるが、それは小説「惆悵」とは異なり、三人の関係が決着した後の友情と理解をテーマとしている。また、「三年」が謝冰心らしい無駄のない文章で書かれ、三千字弱と短いのに対し、小説「惆悵」は様々な出来事を盛り込んでダラダラと続き、二万字強という長さになっている。謝冰心の作品は短篇が大部分を占める。建国前に書かれた小説のうち最も長い「遺書」（一九二二年六月）でも一万五千字足らずである。仮にこの小説「惆悵」が謝冰心の作品であるとするならば、この作品を収録している『冰心女士全集』が出版された一九三〇年当時においては謝冰心の最長の小説となる。当然一九三三年に出版された『冰心小説集』（冰心全集之一）にも収録されていなければならぬだろう。全集を編む時にこの作品を漏らしてしまうというのはいずれあり得ないと感じる。

以上のことから、小説「惆悵」が謝冰心の作品であるとは非常に考えにくい。それにも関わらず、小説「惆悵」はなぜ海賊版とはいえ謝冰心の文集に収録されたのか。考えられるのは、タイトルが謝冰心の詩「惆悵」と同じなので、海賊版の編者が謝冰心の作品だと誤って収録した。もしくは、出版社が最初から謝冰心の名で出版することを告げて偽作を書くよう依頼した、という二つの可能性である。

実は小説「惆悵」には謝冰心の作品を連想させる箇所がいくつも見られるのである。そもそも主要な登場人物の名前からして謝冰心と関連があり、主人公の炳星 (Bingxing) は冰心 (Bingxin) とよく似ているし、施因 (Shi Yin) も宛因 (Wan Yin) を連想させる。宛因とは謝冰心の散文にたびたび登場する人物で、常に「冰心」と共に登場する「精神上的的朋友」。もちろん謝冰心の本名、婉瑩 (Wan Ying) から取った名である。

以下、小説「惆悵」と謝冰心作品の類似点を列挙する。

・ 小説「惆悵」末尾：「彼らの心のうちに覚悟と歡喜の惆悵が湧き起った(他們心中都起了一重覺悟歡喜的惆悵)。」
謝冰心「十字架的園裏」：「あのわずかに覚悟と歡喜を帯びた『惆悵』(那微帶着覺悟歡喜的『惆悵』)。」

・ 小説「惆悵」薛炳星が杭州から黄施因宛てに出した手紙：「私は教育界のために更に幾年か奔走したら、あつさり世間から身を隠そうと思う。隱遁し、出家するのは、私は不贊成(遁世而出家、是我所不贊成的)で、どうであつても、一日世に在れば、一日社会のために義務を果たさねばならない。私は灯台を見守りに行こうと思う(我想到要看守灯塔去)。」

謝冰心「往事(二)・八」謝冰心が父親に向かつて話した言葉：「私は灯台を見守りに行きたい(我想看守灯塔去)」、「隱遁し、出家するのは、私の潔しとしないことだ(避世而出家、是我所不屑做的)。」

・ 小説「惆悵」薛炳星が黄施因たちに「青年與結婚」(講演のタイトル)について語る場面：「私が主張するのは理性の結婚です。恋愛は理性の土台の上にある。(男女)双方が互いに自分たちの結婚は、家庭の幸福のためだけでなく、社会のために幸福を造ることができると感じる。将来成し遂げられる功勳と業績のために(結婚)するのだから、双方は永遠に助け合う必要がある。このような結婚は、結婚を一種の事業を確立する手続きとなすことになる(這樣是以婚姻作一種建立事業的手続)。」

謝冰心の処女作「兩個家庭」のあらすじ：主人公が学校で「家庭と国家の関係」という講演を聴き、また対照的な二つの家庭を見て、家庭の幸福と苦痛は、男子の事業を築く能力（原文は、建設事業能力）に影響することを実感する。

他にも類似の箇所はいくつもあり、例えば小説「惆悵」中、薛炳星が詠んだ詩は、その一行一行の短さ、「紅葉よ！」「秋花よ！」「詩人よ！」という呼びかけを多用している点など、謝冰心の詩集『繁星』、『春水』に収録された小詩とよく似ている。

謝冰心の作品の影響を受けているのはもちろんのこと、部分的に謝冰心作品を切り貼りしているのである。そうしたことを考えると、小説「惆悵」は誰かが謝冰心の名を借りて（つまり騙って）書いた偽作で、謝冰心作品と類似点が多いのは、読者を欺くためなのでは、と思われる。

再び先に挙げた七種の海賊版の収録作品を見ると、これらの本は全体的に一九一九年から二二年までの謝冰心が最もよく作品を書いていた時期の小説はあまり収録しておらず、「別後」（一九二四年九月）、「姑姑」（一九二五年六月）等、なるべく後の小説を収録しようとしていることがわかる。出世作「斯人独憔悴」（一九一九年）や代表作「超人」等があまり入っていないのは、すでに多くの読者が読んでいて、新鮮味がないためだろう。以前注目を集めた作品よりも、なるべく新しい作品の方が良く売れるということであり、出版社は謝冰心の新作を手に入れて出版したいと考えたはずである。だが当時の謝冰心はなかなか作品を書かなかつた。そこで新作の代わりに偽作を収録することを思いついたのではないだろうか。

作品集が正版、海賊版合わせて各種出版され、偽作まで登場したというのは、やはり謝冰心の人気の高さによるのだろう。少なくとも一九三〇年代当時の出版社に謝冰心の作品であれば、謝冰心の作品だと偽れば、よく売

れる、という見通しがあつたことは確実である。そして、偽作は読者の謝冰心の新作を読みたいという要求を反映して作られたのである。

たとえ他の作家、批評家たちに批判され、「過去の作家」と見なされても、一九三〇年代の謝冰心はまだまだ人氣作家で、多くの読者がその作品を待ちわびていたのである。

注

- (1) 「繁星」、「春水」は全節で一首とカウントしている。
- (2) 潘垂統「對於超人命命鳥低能兒的批評」『小説月報』第十二卷第十号、一九二一年十一月。
- (3) 『民国日報附刊・覚悟』。
- (4) 『西澄閑話』新月書店。
- (5) 二冊の小詩・詩集『繁星』商務印書館、一九二三年一月、『春水』新潮社、一九二三年五月のこと。
- (6) 短編小説、散文集『超人』商務印書館、一九二三年五月。
- (7) 李希同編『冰心論』北新書局、一九三二年所収。初出は黄英『現代中国女作家』一九三二年。
- (8) 茅盾「冰心論」『文学』第三卷第二期、一九三四年。
- (9) 謝冰心「我的文学生活」『青年界』第二卷第三号、一九三二年十月二〇日。
- (10) 謝冰心「假如我是作家」『晨报副鐫』一九二二年二月六日。
- (11) 謝冰心は一九一九年から二二年までの四年間に三三篇の小説を発表したが、一九二三年から二九年までの七年間には七篇、一九三〇年代の十年間には五篇の小説しか発表していない。
- (12) いずれも北京図書館編『民国時期総書目』書目文献出版社、一九九二年十二月による。
- (13) 前掲、謝冰心「我的文学生活」。一九三二年清明節に執筆したもので、『冰心小説集』（冰心全集之一）に「自序」として転載された。

- (14) 同右。抜粋中の()内は筆者による補足。
- (15) 吉少甫主編『中国出版簡史』三四一頁〜三四五頁、学林出版社、一九九一年十一月、及び中国大百科全書出版社編『中国大百科全書新聞出版』十七頁、一九九〇年十二月による。
- (16) 前掲『民国時期総書目』による。
- (17) 建国後の謝冰心の小説には五万字を越える「陶奇的暑期日記」がある。『陶奇的暑期日記』上海少年儿童出版社、一九五六年五月)だが、この小説は例外で、他の小説はみな短編である。
- (18) 宛因：謝冰心「無限之生」的界綫』『晨报』一九二〇年四月三〇日；同「問答詞」『晨报』一九二二年七月二七日；同「遺書」『小説月報』第十三卷第六号、一九二二年六月；同「往事(一)」『小説月報』第十三卷第十号、一九二二年十月に登場する人物の名。「遺書」、「往事(一)」の中に「精神上的朋友(精神上的友)宛因」とある。
- (たがわめぐみ・お茶の水女子大学大学院博士後期課程)